

第 38 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

自由部門

優良賞『『美しいもの』に会う』

日本文学科 4 年 1 組 山崎未侑

生きてると、たまに「美しいもの」に出会うことがあります。

先日、このような体験をしました。安田女子大学の A 棟アトリウム 1 階には、ピアノが一台設置してあり、昼休憩の時間になると学生や教職員が自由にピアノを弾き、学内ではストリートピアノのような役割を担っています。ある日、研究室訪問を終えて帰ろうと A 棟のエレベーターを降りたとき、どこからかピアノの音が聞こえました。時刻は 18 時頃で、ピアノを弾いても良い時間は昼休憩の時間のみであったはずですが、こんな時間に、一体誰が弾いているのだろうと私はピアノの方へ向かいました。

ピアノを弾いていたのは、白髪交じりの初老の男性でした。

彼は背筋をぴんと伸ばし、ゆっくりとピアノを弾いていました。演奏しても良い時間外であるのに、堂々とした佇まい。曲名はわかりませんでしたが、どこか懐かしい音色でした。彼の演奏は、プロの奏者が弾くような完璧さは無く、躓いたらもう一度その箇所を弾き、どこか覚えぬが、一音もこぼさない丁寧さがありました。私は、彼の邪魔にならないように、離れた場所で演奏を聴きました。

A 棟のガラス張りの屋根から夕日が差し込んで、アトリウム内を包み、ピアノの音だけがその空間に静かに響いていました。

しばらくして、彼は演奏を止め、紅色の布を鍵盤に丁寧な手つきでかけ、音をたてないように蓋を閉め、去ってゆきました。彼の後ろ姿を見送って、「本当に美しいものをみてしまった」と思いました。またこの演奏を聴きたいが、彼が誰なのかもわからず、あまりにも現実味のないことであったため、もう二度と聴けないのかもしれないとも思いました。

歳を重ねるにつれて、青信号が点滅すると走って渡ってしまうような忙しさが身に付くようになってしまったように思います。何も急ぐ必要なんてないはずなのに、私はいつも眉間に皺を寄せて、猫背でせかせかと歩いてしまうのです。

そのせいなのか、生きていて、いつの間にか見落としているものが多くなりました。幼い頃、見るもの、聞くものすべてが新鮮で、美しくみえた、しかし今となってはそのように感じる機会が減ったように感じます。

毎日毎日、めまぐるしく過ぎていく日々を身を委ね、いつのまにか季節が巡っている。もうここまできてしまったか、と思うことが非常に「怖い」と思うのです。

けれどもたまに、そんな生き急ぎ野郎の私の裾を、スッと引くものがあります。それは今回の体験のように、突然私の前に現れて、私に、「少し立ち止まって」と諭し、狭まった視野を広げ、ふと我に還るように仕向けてくれる。そのたびに私は、「あ、私、生き

急いでいる」と気づき、だらしなく曲がった背中を伸ばすのです。

これから私は大学を卒業して、社会へ出て行きます。世の中は相変わらず忙しく動いていて、新しいものが古いものになり、生まれては消えを繰り返し、循環しています。

そんな世界で、純粹で初々しい感受性を守り、養って生きていくことは、とても難しい。けれど私は、世の中に潜む「美しいもの」たちを見落とししたり、気づかないふりをしたり、「けっ、こんなもの」と蔑ろにするようなことはしたくないのです。せかせかと時間ばかりに追われて、何にも感動できず、悪態ばかりついているような人生はさぞかしつまらないことでしょう。

「美しいもの」に出会ったとき、人は少しだけやさしくなれる。

この世は、私がまだ知らない、気が付いていない、「美しいもの」に溢れています。私が死ぬまで、あとどのくらい「美しいもの」に出会うことができるのでしょうか。

この先歳を重ねても、数多くの「美しいもの」に出会えるように、私は日々、だらしない背筋を伸ばして、胸を張って歩いています。